法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

埴谷雄高研究 ： 紀行について

田辺，友祐

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文学誌要 / 日本文学誌要
(巻 / Volume)
72
(開始ページ / Start Page)
25
(終了ページ / End Page)
35
(発行年 / Year)
2005-07
(URL)
https://doi.org/10.15002/00010096

Hosei University Repository

埴谷雄高研究
——紀行について

田辺友祐

はじめに

字引で「紀行」を調べると、次のように定義付けられている。

旅行中の体験、見聞、印象などを書きつづったもの。単なる地誌、記録の類から、修辞に気をくばった美文、作者の深い思索を示すものなど、多種多様。日本では、「万葉集」にその萌芽が見られるが、独立した作品としては紀貫之の「土左日記」が最初のもの。以後、多くの作品が書かれ、文学の一領域をなしている。紀行文。道の記。旅日記。道中記。旅行記。

（『日本国語大辞典』第二版第四巻、二〇〇一年四月、小学館）

近現代の紀行文学も枚挙に暇がなく、戦後に限定した場合でも、小田実『何でも見てやろう』（一九六一年）や沢木耕太郎『深夜特急』（一九八六～九二年）のように、洛陽の紙価を高めた作品が幾つもある。或いは、夏目漱石の英国留学、島崎藤村の仏蘭西渡航、川端康成の伊豆旅行のように、旅先での出来事や見聞が、作家に多大な影響を与えた例も数知れない。

しかし、生涯唯一の洋行を、「あまり得るところなかった」（立原正秋宛書簡）と判断した作家もいる。その作家の著作集の一つである『埴谷雄高作品集』第一一巻（河出書房新社、一九七九年八月）は、紀行文集として編まれている。所収の作品は、海外旅行を綴った『姿なき司祭』（河出書房新社、一九七〇年九月）と『欧州紀行』（中公新書、一九七二年一二月）の二篇である。この他にも、埴谷雄高には紀行文が多々ある。ここでは、主要なものに限定して掲出する。

Hosei University Repository

「台湾遊記――草山」（『南画鑑賞』一九四〇年八月号）
「トルキスタン紀行」（『展望』一九五〇年一一月号）
「櫃島」（『朝日ジャーナル』一九六二年一〇月二一日号）
「日田」（『朝日ジャーナル』一九六三年一一年一七日号）
「パネルの上の黒いランプ」（『IBM REVIEW』一九六四年一一月号）
「無言旅行」（『風景』一九六六年一〇月号）
「『ますだ』の一夜」（『日本小説を読む会』会報、一九七八年四月）
「土湯の一夜」（『盆地』第二八集、一九八一年一一月）
「ラインの白い霧とアクロポリスの円柱」（『海燕』一九八六年一月号）
「雨颱風と浜名湖会」（『未来』一九九〇年一一月号～一九九一年一月号）

さらに、紀行とはいえないが、部分的に旅に言及した随筆や、大江健三郎や小田実らの紀行文の書評がある。一方で、埴谷雄高が綴った紀行の先行研究は、『姿なき司祭』と『欧州紀行』の文芸時評や書評が大半である。目下のところ、本格的な論考は尠なく、研究の主題として確立していない。国内旅行への言及も、その同行者による随筆や追悼文が大半であり、第三者の発言は皆無である。本稿では、埴谷雄高の国内の旅行と、それを対象にした紀行を中心に総合的な分析を行なう。

一

諸種の年譜（注）によれば、埴谷雄高の主な旅行先は次のとおりである。

一九一五年	母に連れられて二か月の内地見物。歌舞伎座で芝居観劇。
一九二一年三月	母の引率で、二か月の東京見物。
一九二〇年代中頃	東京移住後、夏休みは本籍地の福島県小高町で過ごす。
一九二五年夏	夏休みに友人と富士山麓巡りの野営旅行。
一九二七年七月	結核の療養で北海道へ。
一九三一年八月	全農左派代表者会議のため京都の鞍馬へ。
一九三九年冬	数か月間、姉の住む台北や郊外の温泉地に滞在。
一九四〇年	御嶽山へ経済情報社の社員旅行。
一九四三年二月	伊豆の嵯峨沢温泉で、ウォルインスキイ『偉大なる憤怒の書』翻訳。
一九五一年三月	『近代文学』同人と『中国文学』同人とで湯河原へ。
一九五八年一月	荒正人らと東海村の原子力発電所や千葉の火力発電所を見学。
一九六〇年八月	本多秋五らと黒四ダム工事見学後、浅間温泉へ。

Hosei University Repository

一九六二年一〇月	会津若松で「サド裁判」について講演。
一九六四年三月	『近代文学』同人と城ヶ島旅行。『近代文学』廃刊の話をする。
一九六五年一〇月	椎名麟三らと梅崎春生文学碑建立の打ち合わせのため鹿児島へ。
一九六六年五月	坊津の梅崎春生文学碑の除幕式に出席。
七月	旧『近代文学』同人と浜名湖旅行（以後、毎年恒例に）。
七月	島尾敏雄らと「相馬野馬追い」を見物。
一九六七年一一月	「原民喜の文学と生涯」の講演会のために丸岡明と広島へ。
一九六八年七月	欧州を中心に三か月の洋行。
一九六九年六月	富士霊園で梅崎春生墓参後、武田泰淳の富士山荘訪問。
六月	還暦祝いを兼ねた浜名湖旅行。
一九七二年五月	京都の「高橋和巳を偲ぶ文芸講演会」で講演。
一九七五年六月	浜松美術館の硝子戸に頭を打つ。
一九七六年五月	二年続けて京都大学で講演。
一九九〇年九月	浜名湖旅行の際に台風に遭遇。
一九九三年一二月	浜名湖旅行にリュックサックで参加。

さらに、所謂「空想旅行」も行なっている。『展望』一九五〇年一一月号に発表した「トルキスタン紀行」は、架空旅行記である。

埴谷雄高には、「私は実際の旅行を殆どしない」（「州境いの河」『世界』一九六二年九月号）、「徹底したものぐさで小旅行もせず」（「竹内好の追想」『群像』一九七七年五月号）、「私は旅行嫌い」（「『海燕』のこと、附記」『海燕』一九八二年三月号）といった発言がある。また、単行本や『埴谷雄高全集』未収録の座談会「旅を語る」（『近代文学』一九六四一月号～二月号）でも、埴谷雄高は寡黙であった。埴谷雄高の自己分析によれば、「実際の旅行」を好まないのは、「年少の頃からの空想旅行の癖に精神の深い芯まで毒されてしまった」（「州境いの河」）からであるという。幼少期から病弱であったため、病床で空想に耽る時間が多大にあったと思われる。

しかし、右に掲げたように、旅の回数は決して尠ないとはいえない。また、『近代文学』同人との浜名湖旅行（通称「浜名湖会」）でも、仲間との深夜の語らいを楽しんでいる。随所で述べた「旅行嫌い」とは、「晴」としての車や電車などの交通手段による長時間の移動や名所の観光を好まないという意味であって、対して、「褻」に位置付けられる旅館での賑やかな歓談こそが、埴谷雄高に於ける旅の最大の醍醐味であったと考えられる。

二

一九〇九年（戸籍上は一九一〇年元旦）に生まれた埴谷雄高の初めての本格的な旅は、一九一五年の「内地見物」である。川西政明『評伝埴谷雄高』（一九九七年七月、河出書房新社）

Hosei University Repository

には、「二一年に東京見物にくる。埴谷雄高が日本を知った最初である」との記述があるが、一九一五年が最初である。出生地での小旅行の回想は見当たらないが、旅行先で撮影したと思われる写真が、『埴谷雄高全集』などの書物に掲載されている。大岡昇平との対談「〈少年〉と〈夢魔〉」（『文芸展望』一九七五年一〇月号）によれば、二度目の東京滞在では、まず船で神戸に到着し、湊川神社に向かった。日本人が海外の「特定の場を支配すると必ず神社が創建された」（大越愛子「天皇制イデオロギーと大東亜共栄圏」、岡野幸江・北田幸恵・長谷川啓・渡邊澄子編『女たちの戦争責任』所収、東京堂出版、二〇〇四年九月）とおり、台北には寺や神社があったが、埴谷雄高の生まれ育った頃の台湾南部には無かった。そのために、「へーえ、神社っていうものがある、と思ったな」という感慨を抱いた。これは、埴谷雄高の特徴の一つである「日本人の生まれながらの原初的な心情っていうもの」の欠落に繋がっている。その後、東京で重い肺炎に罹り、芝白金の北里病院に入院する。埴谷雄高に於いては、疾病と旅の関連も見逃してはならない要素である。紀行関連の文章のなかで、体の不調や衰えを訴えた事例が多数ある。

一九二三年、埴谷雄高は東京に移住する。父は東京で家族と同居せず、福島県相馬郡小高町に独居した。中学生の頃は、夏休みになると小高町に行き、父と二人で過ごした。母に対して家庭内暴力を振るっていた父を、当初は快く思っていなかったが、小高町で夏季休暇を送るうちに、反抗心が消えたという（大岡昇平・埴谷雄高『二つの同時代史』、岩波書店、一九八四年七月）。

二年後の富士登山のとき、「三人の友達とともに小さなテントとコーンビーフなどの缶詰め類をつっこんだリュックザック（ママ）」（「武田山荘のエクトプラズマ」『海』一九八二年一月号）を担いでいた。ところで、浜名湖への旅に赴く晩年の埴谷雄高の姿が、或る追悼文にて、次のように描写されている。

> ひとりでの旅行は不安であるということから、わたしがエスコート役となった。吉祥寺の家に迎えにうかがうと、すでに外出の用意をされていたが、そのとき、アッと内心驚いたのは、手提げ鞄ではなくて、リュック・サックに荷物をつめこまれていたことである。これでなければ目まいによる突然の「材木倒し」に対応出来ないし、ステッキをついて歩くにもずっと便利なものだ、本多秋五さんもそうだとのことで、成程と頷くことができた。（中略）以前の颯爽とした外出の出立ちが頭に刻みこまれていてつい失念し、ことあらためて年齢について考えなければならなかった。
>
> （立石伯「二つのリュック・サック」『週刊読書人』一九九七年三月七日号）

浜名湖旅行は、『近代文学』廃刊後に藤枝静男の発案で始まった。或る年、静岡県藤枝市で眼科医勝見次郎の診察を受けた埴谷雄高は、白内障の罹患が判明した（「白内障」『南北』一九六七年七月号）。また、視力の低下が原因で、浜松美術館の

Hosei University Repository

硝子に衝突するなど（「漠とした世界」『新潮』一九八三年三月号）、自身の病気や身体の衰えをも交えて描いていた。少年時代の富士登山でも、「不健康非優良児の私は七合目で疲れ果てて坐りこんでしまい」、自らを「思索倒れの非肉体行動者」と規定している（「しごとの周辺」『朝日新聞』一九九一年一月九日夕刊）。

父の勧めで、一九二七年に結核の静養で北海道に滞在している。埴谷雄高特集が組まれた雑誌の「好きな町」という設問に、「狩勝峠から眺めた十勝平野」（「埴谷雄高プロフィール」『太陽』一九九二年六月号）と答えている。このとき、或る作家の訃報を聞き、遺稿の載った『改造』と『文藝春秋』を購入した。「彼の自殺はおれのニヒリズムの『やけのやんぱち』を何か純粋化したような一種の衝撃だったんだ。このときが文学へいくか、左翼の政治運動へいくかの分かれ目だったんだろうね」（『二つの同時代史』）という発言がある。北海道滞在を以てしても病気は完治せず、以後四半世紀の宿痾となる。戦時下に召集を免れた理由も結核のためであった。さらに、一九五二年から一九五六年にかけて、四度目の結核で自宅療養を送っている。

一九三九年の冬から数か月間、姉の住む台北を旅する。当地で雑誌『構想』の創刊号を受け取っている。そもそも、「ルンペン生活のひまにまかせてこれまた『やけっぱち』ふうで遊びに行っていた」（「戦争中のこと」『文藝』一九七八年六月号）とあるように、目的の不確かな旅行であった。しかし、旅の産物として、随筆「台湾遊記――草山」（以下、「台湾遊記」）と短篇「虚空」（『群像』一九五〇年五月号）が描かれた。

少年時代を過ごした台湾での思い出は、『二つの同時代史』など数々の回想で顧みている。入植者である日本人と現地の人々の関係を通じて、植民地の実態に端を発する「自同律の不快」の原型が形成される過程を自己分析している。埴谷雄高の台湾旅行は、海外ではなく「外地」への旅という扱いになる。「台湾遊記」と「虚空」の主な舞台は、台北の紗帽山である。この山は、「円い帽子をふせたようなこの山の形状は恐らく日本で最も美しい山の一つなのではあるまいか」（「台湾遊記」）、「乳鉢をふせたような、銀色に光った葉々に覆われた円い山」（「虚空」）と描かれている。だが、実際の紗帽山と埴谷雄高の素描には、些かの懸隔がある。

> 現実には、相思樹という樹木などが繁茂した小さな、あまりにも小さな山であった。見る角度によれば、山容は富士山を髣髴とさせるトロイデのやさしい形姿であり、烏帽子山という美しい別称をもっていた。だが、別の方向からみれば小峰の重なる連山の一つであった。
>
> （立石伯「埴谷雄高の一つの謎」『埴谷雄高全集』第一六巻月報一六、講談社、二〇〇〇年九月）

「虚空」の紗帽山は、「自分が置かれているこの現実の直接的反映を私が構築した世界のなかへ持ちこまない」（「還元的リアリズム」『近代文学』一九五五年五月号）原則によって、美しい山に変貌したのである。頂上での旋風は、埴谷雄高が武田泰

Hosei University Repository

淳の創作方法を評した有名な文言であるところの、「実に発して虚に展開する一種奇妙な実験小説の赴き」（「解説」、武田泰淳『風媒花』所収、河出文庫、一九五六年二月）を想起させる。「戦争中のこと」によれば、紗帽山を毎日のように「眺めていただけ」に過ぎず、登山を試みていない。従って、「虚空」からも空想旅行の要素を見出せる。

ところで、『姿なき司祭』に、ドストエフスキー『罪と罰』の「K橋」（コクーシキン橋）が、実際に行ってみると小さな橋に過ぎなかった、とある。紗帽山を誇張して描いた埴谷雄高が、実在の「K橋」を見て戸惑ったために、自己の創作方法の一つである「極端化」（『死霊』自序）の効果を、身を以て逆説的に示した結果となった。

戦時下の一九四三年になると、嵯峨沢の温泉宿に籠って、二十数日で『偉大なる憤怒の書』の翻訳を完成させる。「一生に一度しかない珍しい勤勉さ」（「思い違い」『海燕』一九八七年一月号）を発揮したと本人は回想している。埴谷雄高のドストエフスキー研究は、温泉地から始まった。『偉大なる憤怒の書』の翻訳を短い期間で仕上げた背景には、言論統制によって翻訳書の出版すら不可能になりかねないとの危機感があった。既に、統制の一環である雑誌の統廃合の煽りを受けて、『構想』が廃刊となっていた。作品を発表する舞台を失った埴谷雄高は、『近代文学』で『死霊』の連載を開始する迄、小説執筆を行なっていない。

戦後派作家のなかで、戦時下の一九四〇年代前半に最も盛んに文学活動を行なっていたのは、埴谷雄高であろう。『偉大なる憤怒の書』を含む翻訳二冊と美術評論一冊を上梓している。いわゆる「戦時下三部作」の第一作は、ドナウ河流域諸国の歴史や第二次大戦前夜の様相を論じた『ダニューブ』の翻訳である（地平社、一九四二年五月）。戦後、欧州はドナウ河を挟んで東西に分裂した。「ダニューブの過ぎてきた後には凡てのヨーロッパが、その希望と絶望、闘いと平和とともに横たわっている」との一文は、この大河の歴史上の性質を如実に凝縮している。

ドナウ河の下流には、旧ソビエト連邦のウクライナ共和国がある。ウクライナと同じく旧ソビエト連邦の一員であった中央アジア五ヶ国は、チベットとともにトルキスタン地方に位置する。架空旅行記「トルキスタン紀行」は、スウィフト『ガリヴァー旅行記』や仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』のような創作ではなく、短い随筆である。短文ではあるが、国境への関心が表明されている。埴谷雄高には、「軍隊、国境、排外的な愛国心」を国家の「三本の柱」とする分析がある（「死滅せざる『国家』について」『世界』一九六三年一一月号）。また、欧州旅行の際、ストックホルム空港では旅券検査や税関が皆無であったのを「国境の廃止」の萌芽であると評価している（「国境の問題」『朝日新聞』一九七四年三月一六日夕刊）。国境の遥か上空を通過する宇宙旅行にも興味を抱いていた。国境の問題が常に後景に潜んでいる『ダニューブ』の翻訳は、研究の場で顧みられる頻度が低いが、埴谷雄高の関心と結び付けた場合、再評価が必要な一冊である。

戦時下最後の刊行物は、美術評論『フランドル画家論抄』

Hosei University Repository

（洸林堂書房、一九四四年五月）であった。対象を社会主義国に限定した『姿なき司祭』とは異なり、『欧州紀行』には、絵画に関する記述が多い。「私達が外国旅行へでると、訪れた都市で赴いてみる『千篇一律のきまり』の一つは、本国にいれば日頃覗いたこともないところの美術館」（「ルクレツィア・ボルジア」『潮』一九六九年八月号）であり、それを「外国旅行病」と命名した。しかし、『欧州紀行』に充溢する絵画の文章は、単に「外国旅行病」と呼ぶには不相応な含蓄を含んでいる。興味本位で美術館を訪れたのであれば、無名の画家バルトロメオ・ダ・ヴェネツィアの作品「ルクレツィア・ボルジア？」を評価し得ないであろう。

このように、戦時下の埴谷雄高は、時局とは対蹠的な文学活動を行なった。身を「大日本帝国」に置きながら、心は異国を自在に駆け巡っていたのであった。

三

夢や想像力を駆使して架空の宇宙旅行をした作品が、短篇「闇のなかの黒い馬」（『文藝』一九六三年一二月号）である。ここで重要な役割を担っている動物が馬である。前述のように埴谷雄高は台湾で生まれ育ったのだが、本籍地は福島県相馬郡小高町であった。「小高についての記憶はあまりに僅かなものです」（「ふるさと」『小高町公民館報』一九六三年三月二五日号）と回顧しているように、中学校在学時の夏季休暇以外には本籍地を殆ど訪れていない。その相馬地域の有名な行事といえば、野馬追いである。埴谷雄高は一九六六年に、同じ本籍地の島尾敏雄とその子供や甥の佐々木孝とともに見物に行った。しかし、旅行の直後に発表した「無言旅行」では、行事そのものには触れず、島尾敏雄の娘に対する心配を中心に据えている。

『闇のなかの黒い馬』を刊行する二年前に、欧州旅行を行なっている。冒頭で記したように、洋行の産物が『姿なき司祭』と『欧州紀行』である。この旅では、政治論文で示した見解を証明する出来事が幾つもあった。例えば、飛行機の車輪の故障でモスクワの空港への到着が遅れた際に、入国審査に四時間もの時間が掛かるという官僚機構の愚昧さに直面してしまう。

> 私が一旅行者として、偶然、ソヴェト・ロシアで知った官僚なるものは、書類の上で事態が整うこと、換言すれば、彼自身の仕事の範囲内ですべてに支障がないことに専念して、その書類の向う側にいる「人間」に対する自然的な人間的感情の一片鱗、共感や同情を含むところの「相手の身になってみる或る種の思いやり」といったものがまったく皆無なのに驚かされたのであった。
>
> （「象徴のなかの時計台」『群像』一九六九年三月号）

『幻視のなかの政治』（中央公論社、一九六〇年一月）を始めとする政治論文の大半は、抽象度の極めて高い内容である。しかし、紀行文での政治的言説は、具体的であり、率直な意見となっている。偶発的かつ不可解な困難を、「《カフカ的状況》」（『姿なき司祭』）と命名したのは、状況の根底を冷静に把握し

Hosei University Repository

得る批評眼の発露である。

埴谷雄高は、社会主義国家からの招待旅行に反対の立場を貫いた。実際、中華人民共和国からの招待を拒んでいる（「天安門事件アンケート」『早稲田大学新聞』一九八九年九月二一日号）。埴谷雄高自身が、その理由を明確に述べている。

私自身、社会主義国の招待旅行反対論者であるけれども、ただに招待側の少数者と被招待者が健康を祝しあう一杯の酒や宴席の料理や航空機や列車のすべてが労働者と農民の汗と労苦からの搾取にほかならぬといった自明の事態によって反対しているばかりでなく、社会主義国における招待費は、本来、「社会主義国自体における労働者と農民の外国行き」に向けられるべきものだからである。（中略）自国の働くものを外国へだしたがらず、逆の招待旅行しか社会主義国におこなわれないのは、権力者達が働くものをいまだに社会主義の主体とみなさず、自分の自由にできる奴隷だとひそかに思っているからにほかならない。

（「宗教と政治と文学と」『世界』一九七三年六月号）

その一方で、例えば一九六一年一一月には、「第五次訪中文学者代表団」（椎名麟三・武田泰淳・中村光夫・堀田善衛）が中国対外文化協会の招待を受けている。三年後にも、同協会と中国作家協会の招きで、大岡昇平・亀井勝一郎・武田泰淳・由起しげ子の四名が中国に渡った。ソビエト連邦の作家同盟からの招きもあり、一九六三年六月には、小林秀雄・佐々木基一・安岡章太郎が彼の地を踏んでいる。これらに埴谷雄高と親しい文学者が含まれているように、埴谷雄高の持論に賛同したのは、仲間内では竹内好のみであったという。しかし、この意見には一貫性がない。「もっと暗黒を！」（『すばる』一九八三年一一月号）では、「見たものが見事に結実する作家」である藤枝静男には招待旅行を勧めたと明かしている。

旧『近代文学』同人が中心の親睦旅行である「浜名湖会」の中心人物は、藤枝静男であった。藤枝静男は、深夜の酒宴の最中に、酔った埴谷雄高が「便所に行こうとしてフラフラと歩き出したとたんに柱の角に顔をぶっつけて、これまた血を出したうえに眼鏡のツルを折ってしまった」（「弁天島会同」『日本經濟新聞』一九八三年八月七日朝刊）という逸話を明かしている。なお、埴谷雄高には、この時の眼鏡の破損に関する発言がない。ともあれ、藤枝静男にとっての「浜名湖会」は、「何ものにも換え難い楽しみ」（同前）であり、それは埴谷雄高にとっても同様であった。

さて、海外旅行で発揮した批判的な眼差しは、万能ではない。例えば、一九五八年に茨城県東海村の原子炉を見学しているが、原子力の危険性には言及していない（「パネルの上の黒いランプ」）。それ以前にも、「一九五四年十大ニュース」（『近代文学』一九五五年三月号）で、三番目に「原子エネルギーの発達」を挙げていた。ところが、原子炉見学の前年に発表した「空間人への出発」（『日本読書新聞』一九五七年一〇月二一日号）では、「技術の進歩の象徴である原子力の夢魔によって、人類の破滅という思いがけざる地点へも追いつめられた」と危機感を表明

Hosei University Repository

している。このように、一九四五年の敗戦直前に、広島の原爆投下を知り、「ついにウラン爆弾が出現したと私達は不思議な恐慌状態に陥った」（「海鼠塀の思い出――『新経済』の頃」『新経済』一九六〇年五月号）埴谷雄高には、原子力の評価に対する揺らぎが認められる。もっとも、それは埴谷雄高のみの問題ではなく、黒古一夫『作家はこのように生まれ、大きくなった――大江健三郎伝説』（河出書房新社、二〇〇三年九月）に指摘があるように、当時の他の文学者にも見られる姿勢であった。原子力絶賛の立場にあった荒正人がその筆頭である。同じく『近代文学』同人であった本多秋五や佐々木基一は、一九五四年に佐久間ダムと発電所の建設工事などを見学した後に、見聞記を発表したが、杉浦明平から、「文芸時評のありかた」（『図書新聞』一九五四年一一月七日号）や「『佐久間ダム見学記について』について」（『近代文学』一九五五年四月号）で批判されている。特に後者では、住民の立ち退き問題や、工事が米国の軍需産業主導であり、即ち「アメリカの戦争政策の重要な一環」である点、または人間の過剰な自然征服などを非難している。なお、当時の埴谷雄高は病臥していたために同行していない。仮に見学に訪れたとしても、爾後に本多秋五「発電所見学記」（『近代文学』一九五四年一一月号）のような、率直な文章を発表するとは考え難い。

ところで、佐々木基一の短篇「断崖病」（『文藝』一九七五年一月号）に、次のような一文がある。語り手の「わたし」と仲間が、建設会社の招待で、ダム建設の工事現場の見学に行った。

> わたしたち一行の中の友人の一人が猛烈な断崖病患者で、こうした場合わたしたちはよく彼の怯えた姿を眺めて、後で笑いの種にすることがしばしばあったが、そのときもテラスの端の鉄柵から下をのぞき、さて断崖病のHはどうしているかとふりかえると、例によってHはテラスの山寄りの岩壁にぴったり身をつけ、それでもまだ足りないかのように、怯えた視線を虚空に漂わせていた。

「断崖病のH」である埴谷雄高にも、この短篇と似た題名の随筆がある。或る年のダム見学の際、自動車で断崖の縁を通った。このとき窓側の席に座っていた埴谷雄高を哀れんで、同行の平野謙が走行中の車内で座席を代わっている（「断崖病について」『ブリヂストンニュース』一九六〇年四月号）。さらに、一九六〇年の黒四ダム見学の翌日に、「高い高いロープウェイ」に乗った際、武田百合子から、「埴谷さんは、そとを見ないのね」と指摘されている（「武田百合子さんのこと」『中央公論文芸特集』一九九三年秋季号）。また、或る雑誌の企画に対して、「山へゆくのはいやだ」と固辞して海に変更させた例がある（「榧島」）。これらを踏まえると、先述の紗帽山に登らなかった理由が、毒蛇の出没ばかりでなく、「断崖病」のためでもあると推測出来る。

本多秋五は、「『死霊』入門」（『日本文学全集第八四巻　埴谷雄高・堀田善衛』解説、集英社、一九六八年一一月）の末部にて、欧州旅行出発直前に行なわれた対談で『死霊』の結末の腹

Hosei University Repository

案を語った埴谷雄高を、「そこまで話してきかせるのは、埴谷雄高の例のサーヴィス過剰である。そこでムッと沈黙してほしかった」と批判している。もっとも、「この対談は、彼の旅行直前に行なわれたものだから、長い海外旅行の途中、もし万一のことがあったら、と考えて彼はそこを語ったのだろうか」という擁護するかのような疑問を以て、「入門」は閉じている。帰国後も、埴谷雄高は至る所で『死霊』の構想を語っている。それを踏まえて、対談や鼎談では（立石伯・埴谷雄高「宇宙的思惟」『週刊読書人』一九七五年七月一四日号、秋山駿・埴谷雄高・吉本隆明「思索的渇望の世界」『海』一九七五年一一月号）、作品の展開を話してしまうと、再び本多秋五に怒られかねないと吐露している。しかし、対談や随筆などでの執筆予定内容の公表によって、瑕瑾が訂正され、立案の構造が堅固になり、それが続篇発表の推進力になった一面もあるのではないか。

『死霊』五章は、四章途絶から二六年振りに発表された。紀行文「ラインの白い霧とアクロポリスの円柱」も、海外旅行から一七年の星霜を経ている。これは「ヨーロッパ旅行最後の文章」と筆者自らが宣言したように、海外の紀行の大団円に相応しいかのような密度を持っている。洋行に主軸を置いた紀行は、確かに「ラインの白い霧とアクロポリスの円柱」が最後だが、しかし、その後も、「新しい論考の時代」（『三省堂ブックレット』第六八号、一九八七年五月）や「国際的批評としての書評」（『リテレール』創刊号、一九九二年六月）などで、パリや旧ソビエト連邦での思い出を回顧している。

埴谷雄高の本格的な紀行の掉尾は、「雨颱風と浜名湖会」である。随筆のなかで旅に関する箇所があるのは、「二人の未完作家」（佐々木基一『停れる時の合間に』所収、河出書房新社、一九九五年四月）が最後となった。

おわりに

埴谷雄高の紀行文では、観光や名産品は、二の次になっている。『死霊』を始めとする創作に具体的な地名が描かれていない理由の一端も、ここから垣間見える。「非現実の場所」（『死霊』「自序」）を舞台にした『死霊』のように、「現実密着」ではなく「架空凝視」の傾向が顕著である紀行も多い。しかし、埴谷雄高自身や旅の同行者の人柄が伝わってくる「現実密着」の文章も描かれており（後者は、「椎名麟三の心臓病」の椎名麟三、「無言旅行」の島尾マヤなど）、埴谷雄高の紀行文は二極化をなしている。

また、欧州の旅に於いては、「埴谷さんの旅行記は旅行記であっていわゆる旅行記ではない。埴谷さんの記憶や瞑想を追認するための、いわば記憶への遡行の旅にも思われる」（宮田毬栄『追憶の作家たち』、文春新書、二〇〇四年三月）と指摘されている。本稿では、国内旅行を視座に据えたために、『姿なき司祭』と『欧州紀行』を含む海外の紀行には、僅かに触れた程度である。さらに、国内と海外の紀行には、比較検討の余地がある。これらの課題については、稿を改めて検討したい。

埴谷雄高と同じく高所恐怖症でありながら飛行機は苦手では

Hosei University Repository

なかった内田百閒の、戦時下と戦後の日記（『東京焼盡』『百鬼園戦後日記』）には、酒に関する記述が多い。埴谷雄高の欧州の紀行に於いても同様である。例えば、酒場で他の旅行者達と杯を酌み交わす場面（「身分制の壁」『世界』一九六九年一月号）や、葡萄酒を「何処のレストランでも必ずボットルで飲んでいた」（「キャラーフとかぶと」『あさめし　ひるめし　ばんめし』第二三号、一九八〇年七月）といった記述がある。「埴谷さんはどこへいっても新宿を歩いているのと変りない落着いた態度だった」（辻邦生「文学的青春のデルポイ神殿」『筑摩現代文学大系　第七四巻　埴谷雄高・藤枝静男集』月報六八、筑摩書房、一九七八年二月）との回想があるように、埴谷雄高の旅は、恒常性を保持し続けた。その姿勢は、自身の創作からも窺える。執筆期間が半世紀に及んだ『死霊』は、一章から九章迄の間に、文体や登場人物の内面に変化がみられるものの、内容の本質は不動であった。最終章となった九章「《虚体》論――大宇宙の夢」（『群像』一九九五年一一月号）は、「嘗て華やかな舞踏会がおこなわれたといわれて一目ではとうてい見渡せぬほど広い奥行きも幅ももった」大広間が舞台である。その中央には、長方形の食卓が、「大いなる空虚のなかの極小孤独な原子群の集積といったふうに孤立して据え置かれている」。極言すれば、ここには作者の寂寥感が反映していると考えられる。妻や多くの友人が鬼籍に入り、実際に「嘗て華やかな舞踏会がおこなわれた」埴谷雄高宅からは、活気が消えた。そのような状態と、作品に漂う静謐が合致するのである。

戦後派の文学者は、恐らく近現代の日本文学史上で屈指の親密度を誇っていた。埴谷雄高の海外の旅行記では、政治的または社会的な言及が目立つが、国内の紀行は、交友記としての牧歌的な傾向を帯びている。付言すれば、文字通り羈旅の記録であるとともに、戦後文学の盟友達や埴谷雄高自身の風貌を知らしめる貴重な証言にもなっている。先行研究に於いては注目の低い分野だが、作家生活の分岐点となった旅もあり、素通りしてはならない要所なのである。

（注）

次の年譜を参照した。立石伯「埴谷雄高年譜」（齋藤愼爾編『埴谷雄高・吉本隆明の世界』所収、朝日出版社、一九九六年二月）、白川正芳「年譜」『埴谷雄高全集』別巻所収（講談社、二〇〇一年五月）。年譜に記述のない旅については、埴谷雄高の文章を参考に掲載した。

（たなべ　ゆうすけ・博士後期課程三年）